

雑誌 致知より

宅急便が二つ届きました。二つとも送り主は同じです。新潟県のある会社の常務取締役をされている女性からでした。一つは瓶詰め。もう一つには本が4冊入っていました。本を見ていて、ある本が目にとまりました。藤尾秀昭著の「小さな人生論3」でした。目次を眺めてみると、縁を生かすというページが気に入り、開いてみると、以前、致知で掲載され、私も読みながら涙を流した文章です。早速、妻に本を片手に読み聞かせました。原文そのまま引用します。

その先生が5年生の担任になった時、一人、服装が不潔でだらしく、どうしても好きになれない少年がいた。中間記録に先生は少年の悪いところばかりを記入するようになっていた。

ある時、少年の1年生の記録が目にとまった。「朗らかで、友達が好きで、人にも親切。勉強もよくでき、将来が楽しみ。」とある。間違いだ。他の子の記録に違いない。先生はそう思った。

2年生になると、「母親が病気で世話をしなければならず、時々遅刻する」と書かれていた。

3年生では「母親の病気が悪くなり、疲れていて、教室で居眠りをする」。3年生の後半の記録には「母親が死亡。希望を失い、悲しんでいる」とあり、4年生になると「父は生きる意欲を失い、アルコール依存症となり、子供に暴力をふるう」。

先生の胸に激しい痛みが走った。だめだと決めつけていた子が突然、深い悲しみを生き抜いている生身の人間として自分の前に立ち現われてきたのだ。先生にとって目を開かれた瞬間であった。

放課後、先生は少年に声をかけた。「先生は夕方まで教室で仕事をするから、あなたも勉強をしていかない？ 分からないところは教えてあげるから」。

少年は初めて笑顔を見せた。

それから毎日、少年は教室の自分の机で予習復習を熱心に続けた。授業で少年が初めて手を挙げた時、先生に大きな喜びがわき起こった。少年は自信を持ち始めていた。

クリスマスの午後だった。少年が小さな包みを先生の胸に押しつけてきた。あとで聞いてみると、香水の瓶だった。亡くなったお母さんが使っていたものに違いない。

先生はその一滴をつけ、夕暮れに少年の家を訪ねた。

雑然とした部屋で1人本を読んでいた少年は、気がつくやうに飛んできて、先生の胸に顔を埋めて叫んだ。「ああ、お母さんの匂い！今日はすてきなクリスマスだ」。

6年生では先生は少年の担任ではなくなった。

卒業の時、先生に少年から1枚のカードが届いた。

「先生は僕のお母さんのようです。そして、いままで出会った中で一番すばらしい先生でした」。

それから6年。またカードが届いた。

「明日は高校の卒業式です。僕は5年生で先生に担当をしてもらって、とても幸せでした。おかげで奨学金をもらって医学部に進学することができます」。

10年を経て、またカードがきた。

そこには先生と出会えたことへの感謝と父親に叩かれた体験があるから患者の痛みが分かる医者になれると記され、こう締めくくられていた。

「僕はよく5年生の時の先生を思い出します。あのままだめになってしまう僕を救ってくださった先生を、神様のように感じます。大人になり、医者になった僕にとって最高の先生は、5年生の時に担任してくださった先生です」。

そして1年。届いたカードは結婚式の招待状だった。

「母の席に座ってください」と一行、書き添えられていた。

このような内容です。

恥ずかしながら、誰もいない部屋で涙を流しながらこの文章をタイプしています。この先生も美しい。またこの医者になった方も美しい。その言葉しか思いあたりません。

私も会社で様々なご縁をいただきました。これまでお世話になりました多くの上司、先輩、そして時には励ましあった同期の後輩。今の私があるのは、こうした方々全員のお蔭と思っています。

皆様に感謝しつつ、ここでペンをおきます。ありがとうございました。